

令和5年度第3回総合教育会議 議事録

1 開催日時

令和5年11月21日(火) 13:15～14:45

2 出席者

(1) 構成員

市長	園田 裕史
教育長	遠藤 雅己
教育委員	佐古 順子
教育委員	中嶋 剛
教育委員	前田 愛
教育委員	船橋 修一
教育委員	朝長 昭光

(2) 講師

NPO法人 schoot	
代表理事	内海 博文

(3) 説明者

教育政策監	江浪 俊彦
教育次長	川下 隆治
こども未来部長	杉野 幸夫
教育総務課長	児玉 英輝
学校教育課長	堺 邦寿

(3) 事務局

企画政策部長	山中 さと子
企画政策課長	三岳 和裕

3 協議

不登校等の児童・生徒への支援について

4 意見交換

フリースクールの現場における不登校への支援について
(NPO法人 schoot 代表理事 内海 博文 様)

5 その他

6 閉会

[資料]

- 1 令和4年度不登校児童生徒の集計結果(大村市基準)
- 2 フリースクールの現場における不登校への支援について

企画政策部長 山中 さと子

皆さまこんにちは。定刻となりましたので、ただ今から令和5年度第3回総合教育会議を開催いたします。

本日司会を務めます企画政策部の山中です。よろしくお願いたします。

会議に入ります前に、お手元の資料のご確認をお願いいたします。

配布しております資料は、会次第、出席者名簿、配席図、本日の議題の協議資料として、1. 令和4年度不登校児童生徒の集計結果(大村市基準)、2. フリースクールの現場における不登校への支援について、以上でございます。皆様、資料はおそろいでしょうか。

本日はフリースクールの運営や、大村市と日本財団との間で締結されました「ヤングケアラーとその家族に対する支援」事業の一部を受託されているNPO法人 school (スクート)の代表理事 内海 博文様にお越しいただいております。後ほど意見交換の場を設けさせていただきますので、皆様よろしくお願いたします。

それでは早速、会次第に沿って進めて参りたいと思います。

開会にあたりまして、大村市長 園田 裕史がご挨拶を申し上げます。

大村市長 園田 裕史

皆さんこんにちは。改めまして令和5年度第3回総合教育会議に大変お忙しい中、教育委員の皆様、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

また、本日は外部講師という形で、内海 博文様にお越しいただきましてありがとうございます。

選挙の詳細等は差し控えますが、こうやって3期目を迎えさせていただくことができました。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

今回もこんなにたくさんの方に傍聴にお越しいただきまして本当にありがとうございます。

大村市の総合教育会議は、手前味噌ですけど

も、継続的に年に4回開催させていただいており、毎回時間が足りないほど非常に活発な議論がなされています。あまりにも活発なので、1回は傍聴席を設けずに、協議会という形でやらせていただいております。大体3回目の今回は、協議会を行う予定だったのですが、前回不登校対策について非常に議論が活発に交わされて、時間が足りない状況でしたので、前回の続きということで傍聴席を設けさせていただきました。

改めて私もこの2期8年間、そして今回の市長選挙を通じて、やはり不登校の問題が非常に大きくクローズアップされていて、それは大村市教育委員会が良くないというわけではなくて、全国的に不登校児童が増えています。その背景や、親御さんも変化してきている状況もあり、自分自身も長男が今21歳で、次男が17歳ですから、もう現役の小中学校の保護者としてPTAに関わっているわけではないので、正直自分もその部分が不安というか、リアルに生の声を聞く機会は以前と比べて減っていると感じました。

なので我々、内部側だけの話ではなくて、第三者の目線でこの不登校の問題を見たときに、どんな問題をはらんでいて、子どもたちが、親御さんがどんなことを言っているのか、それはいいことも悪いことも厳しいことも含めて、実際にお話を聞いてみたいという思いから、今回外部から内海先生にお越しいただいております。

今回1週間の選挙戦を通じて給食の無償化のことや、ボートの財源などが非常に話題になって、結果的に政策論争になったんじゃないかと私は思っております。選挙だどうしても組織の大きい小さい、勝った負けたみたいな話になるのが、良いか悪いかその中身がどうかは別として、給食費やボートなど、教育や子育て支援に関することが非常に話題になりました。私自身は説明責任を果たして、この結果をいただいたと思っておりますし、違う考え方をお持ちの候補者または支援者の皆さん、市議会の先生方も、考えをお持ちだとい

うことですので、12月議会でしっかりその議論がなされて、その説明責任を市議会の先生方からも果たしていただけるのだろうと楽しみにしているところでございます。そういった議論を重ねていって、より良いものにしていければ、大村市にとって有益ではないかなと思いますので、引き続き政策論争を12月議会でも重ねて参りたいと思っております。

今日は不登校一本で協議をさせていただきますので、まずはおさらいと、先ほど冒頭で申しました、内海先生の外部からの視点、それと私も実際に不登校の親御さんからお聞きしたお話など自分の中の考え方について、意見交換をさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

本日も実りある総合教育会議になりますことを心からお願い申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

企画政策部長 山中 さと子

それでは次第3.協議に移ります。ここからの進行は、大村市総合教育会議運営要領第3条に従いまして、市長が行います。よろしくお願いいたします。

大村市長 園田 裕史

それでは協議に入ります。不登校の児童生徒への支援について、でございます。まずおさらいも含めまして、事務局から説明をお願いいたします。

学校教育課長 堺 邦寿

それでは学校教育課から、前回、第2回総合教育会議におきまして、要望があった資料等について、説明いたします。

一つ目は、不登校ではない子どもたちの進学率についてご要望がございました。この件につきましては、資料はございませんけれども、進学率は100%でございます。

二つ目は、不登校から無事に復帰できた子どもの事例、不登校になった経緯、あおば教室・コネでの良い事例等についてご要望がございました。この件につきましては、個人が特定されないよう

にしたいと考えておりますので、資料の配布や議事録への掲載はせず口頭でのみご説明いたしますので、ご了承いただければと思います。

(説明内容省略)

次に大村市の不登校者数の内訳についてご質問をいただいております。その資料が、本日お配りしている資料1になります。

これは昨年度、年間30日以上の不登校児童生徒数になります。不登校児童生徒数の推移につきましては、そこにあるとおりです。また、右の【1000人当たりの不登校者数の比較】につきましては、そこに市内小中学校、そして全国の小中学校の1000人当たりの不登校者数を載せています。ご覧になってお分かりのとおり、ほぼ全国水準で不登校者数が増加している状況にあります。

ここで小学校93人の内訳についてですが、小学校1年生が2人、2年生が3人、3年生が15人、4年生が18人、5年生が20人、6年生が35人の合計93人です。中学校178人の内訳につきましては、1年生が56人、2年生が77人、3年生が45人、合計178人という状況になっています。

各学校から提出されました、不登校児童生徒の上位3つの欠席理由につきましては、小学校が、1つ目に不安などの情緒混乱、2つ目に無気力、3つ目に家庭に係る状況です。中学校につきましては、1つ目が無気力、2つ目が不安などの情緒混乱、3つ目が、いじめを除く友人関係、病気がきっかけとなった欠席となっております。学校教育課からの説明につきましては以上でございます。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。前回からの続きにもなりますし、いろいろと委員の皆さんで不登校に対して思うところと、有識者の皆さんなので以前と状況がこういうふうに変ってきているのではないかと、前回もお話があったかと思いますが、先ほど口頭で堺課長から説明があった部分、また資料1に示されている数字、その背景等も含めて、ご質問等があられたらよろしくお願いいたします。

ちなみにこの最後の、各学校から出された不登校児童生徒の上位5つの欠席理由というのは、学校側から提出されたということですから、学校側が不登校の児童生徒の状態を客観的に見て、こういう形で不登校だろうということで担任の先生が書いた理由と理解していいのでしょうか。そういうことですね。わかりました。

もう一つ確認しておきたいのは、あとで内海さんからお話があるかもしれませんが、全国水準で不登校者数が増加している文科省調査ということですが、全国的に不登校児が増えている全国共通の要因は、何と言われているのでしょうか。もしわかれば教えてください。

教育政策監 江浪 俊彦

全国の数字というのは、文部科学省が行います問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査から出てきている数字となります。その要因というのが、ここに出てきている大村市とほぼ変わらないことが要因と言われています。無気力、不安などの情緒混乱、或いはいじめを除く友人関係、中学校になりますと、ここに学業不振が入ってくると文部科学省の調査結果が出ています。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。それと先ほど口頭で説明がありました、進学を望む子たちについては、100%高校進学できているというのが、この数年の状況ということで、つまり不登校であったとしても、その部分はいろんな意味でご配慮いただいて、進学を希望する子については進学には繋がっているという理解でよろしいでしょうか。

学校教育課長 堺 邦寿

前回、不登校生徒の進学率についてはお尋ねがあり回答しておりますが、その折に令和4年度は不登校生徒の進学率は97.4%ということでご説明しております。あと残りの2.6%が進学をできていないわけですが、これにつきましても、就職、または自宅等で過ごす状況であったと確認しております。この不登校生徒数に上げられない

不登校ではない子どもたちの進学率が100%という意味でございます。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。委員の皆さん何かございませんでしょうか。中嶋委員お願いします。

教育委員 中嶋 剛

説明していただいてありがとうございました。不登校の数字が昨年度の場合は、小学校が93名、そして中学校が178名と出ていますね。それで私は、長崎県が県全体でどのぐらいなのかを調べてみました。長崎県は、公立の小学校で977名、公立中学校では2,038名ということで、これは昨年度の数字なんですけれども、一昨年数字よりも、小学校は232名増、そして中学校は390名の増となっています。ちなみに大村市は、小学校が93名ですので、県と比較すると何%に当たるかというと、県の9.51%になります。中学校の場合は、県との比較は8.73%。小学校の方が多いですね。大村市全体を見た場合に、多いと見るか、少ないと見るか、或いはこのくらいだろうと見るかで大きく違ってくると思うのです。私は数字からいうとやっぱり大村市は多いと判断します。小学校93名、中学校で178名いるわけですので、これを何とかしなければいけないということで、こういう議題が取り上げられたのだと思います。

不登校になった原因は一体何だろうかということで、ここに学校教育課の方でまとめてくださっています。私はこれを大きく3つに分けたいと思います。1つは学校の問題、2つ目は家庭の問題、3つ目は本人の問題。

まず学校生活に起因するものとしては、友人関係、担任との問題、或いは学業不振、これが大きな原因の一つだろうと思います。

それから家庭の場合は、親子の関わり方、保護者の養育力不足などが挙げられる。

そして本人の場合は、生活リズムの乱れ。ゲーム依存やネット依存なども含まれてくると思います。2番目に無気力、不安、3番目に学業の不振、

こういう要因が大体全国的になっているということですね。

文科省が調べた中では、パーセントにして、学校生活に起因するものが36.2%、本人の問題に起因するものが36%で、ほとんど変わりません。家庭生活に起因するものが19.1%。そしてその他となっているようです。本当に心配するのは、全国的に不登校者がどんどん増えているという事実ですね。昨年度は全国で、29万9048名、いわゆる30万弱の子どもたちが不登校に陥っている。

これは前年度よりも5万4108人増と、ものすごい増え方です。こういうことで、この不登校問題は大村市に限らず全国的な問題だということを私たちは頭に入れておく必要があると思っています。

大村市長 園田 裕史

中嶋委員ありがとうございます。前回の協議からこの間に、特に校長先生をされて昔から学校の現場をよくご存知の中嶋委員から、以前と違ってそういう変化があるんじゃないかという分析までしていただきまして本当にありがとうございます。

他、皆さんからご意見ないですか。

教育委員 佐古 順子

大村市の中学校が38名増加ということは今お聞きいたしました。不登校児童生徒の上位5つの欠席理由とありますけれども、これは変化をしているんでしょうか。それとも例年このような形で欠席理由があるのでしょうか。

学校教育課長 堺 邦寿

この状況については、ここ数年は変わらない状況にあります。

大村市長 園田 裕史

私も前回のおさらいと、今回また改めて見たときに、資料1の数字が示すように、小学校の時にこれだけの人数がいて、それが中学校になると2倍強になっているということで、思春期や多感な時期を迎えたときに、大きく反応して倍に増えている。逆に言うと、“中1ギャップ”をしっかりと抑

えていくことができれば、中学校の部分は非常に改善が見られていくと思います。小学校の時にいかに対応していくかで、中学校の数を減らしていくことに繋がるのかなと思いました。

先ほど中嶋委員からも3つの視点、学校・家庭・本人とあって、ここに無気力とありますが、多くは行きたいけど行けないなど本人の問題で、行こうと思えないとか、そこも問題なのでしょうけど、要はさっきの進学率の話で、別に学校に行かなくても高校に行けるだろうと思っている子たちは少ないのだと、実際にいろんな方々のお声を聞いて感じました。これだけ無気力が多かっていると、もう本人も親も別に行かなくていいと思っているご家庭が結構多いのかなと思ったら、そうではないということ、いろんな方々からお話を聞いて思ったところです。

私は、欠席理由の上位5つについて書いてありますが、まさに中嶋委員がおっしゃるように、これは3つに分類されると思っていて、1つは学校の問題で、担任の先生や教職員のスキルアップ、これは研修を重ねていって、学校として不登校に対しての動きを強化していかなければいけない。

あとは前回もお話をして、大村市議会でもよく話題になりますけど、学習の場を保障する意味でフリースクールに対する援助等の議論もありますし、学校以外の場で教育を担保するところを、どこまでどうフォローしていくことで、その子どもさんや親御さんに対応できるのか。実は今後、もう間もなくオープンするんでしょうけど、福岡で実績がある無料の塾が、大村市で開校されるというような話がありました。その方にお話を聞くと、学業不振で不登校の子が、無料の塾に通って学業が復活していくと、学校に行けるようになっていく事例もあるから、単純に学業が追いつかないから行きたくないと思っている子たちもいるのだと思います。それはさっきのフリースクールに対する援助のようなどころにも通ずるのかなと思って、この議論も必要だと思います。

もう1個が、さっきの中嶋委員の話と同じで、家庭教育で、家庭だけではなくて地域とかコミュニティの中で救われている子もいるし、救えることもあると思うので、町内会や子供会、PTA、そこにご家庭を含めたフォローアップ体制を強化していかなければいけないなと思っています。

そういった中から具体的に、せっかくこうやって協議を重ねているので、私としては大村市は、全国に先駆けて、コンネやおおば教室をしっかり公がやれているんです。やれているんですが、もう1個新しい取り組みを始められないかなと思っていて、その部分を、今後具体的に詰めていきたいなと思っています。

自分の中では、いろんな話を聞くと当然フリースクールも外にあっていいのかもしれませんが、家からフリースクール・コンネ・おおば、そしてまた直接家となって、学校に行けなくなってしまう。もう一つワンクッション、学校の中に校内分教室、校内フリースクールみたいなものがあったら、出て行く前に止められるし、出て行ったあとも帰って来やすくなったりするのかなと思っているところです。

教育委員 船橋 修一

今日ここにご参加いただいた方の中で傍聴席の方も含めて、不登校だったという人はほとんどいないと思うので、発言させていただきます。

私は中学校、高校と不登校でした。今理由を聞いて、思い当たる節はありますね。私が中学校の頃というのは、今の時代と違いますので、私の親は両親とも水商売で、父はバンドマンでした。学校に行って、担任の先生とかからそういうことを言われたこともあります。最初に学校に行くのが嫌になったのは、そういう家庭環境がいじめの対象になったというのもありましたね。ただもうひとつあるのは、学校の勉強が面白くなかった、というよりも私の駆け込み寺は、当時としては立山にあった長崎の県立図書館。朝から県立図書館に行って、朝から晩までずっと本を読んでいた

し、私の場合は学校に行かなくても、学校の成績は落としたことはあまりなかったです。そういう意味で、授業が非常につまらない。県立図書館に行って本を読んでいた方がずっと面白いというのもありましたね。ただ、その時一番辛かったのは、学校の先生から、「もう君の進学は不可能だし、君の人生終わりだ」というようなこと言われたのが一番辛くて、これは今でも生きていてのではないかと思うんですが、不登校だった私が今言えるのは、不登校だから人生が駄目になるということはずまいと思うんですね。救われたのは、やっぱり母が非常に私のことを肯定してくれましたし、日本では学校に行けなかったら、将来アメリカに行こうとその時に決めましたので、そこからバックキャストして、もう独学でやろうというふうに思ったのもあります。なので、今、日本の社会で多分不登校の子たちは、間違いなくもう自分の人生終わりだとほとんど思っていると思うんですね。そんなことはなくて、それは多様な人生の中で、人と違った人生を歩んで、違う未来があって、そこからバックキャストすると、可能性が広がるというものを教える仕組みがあるのではないかと思いますし、実際アメリカに行って授業を受けた時に、不登校だったという話をしても、「そんなのいっぱいいるよ」と言われて、本当に周りに、全く義務教育を受けずに大学生になった人もいっぱいいました。非常に考え方が変わったなと思います。だから、学校に行かなかつたら未来が終わりというようなフォアキャストじゃなくて、いろんな人生があるということをやっばり子どもたちにも知らせる必要があるなと思います。

今、個別でよくご両親の方や、実際学校に行っていない子と話すこともありますけれども、自分の体験からそういうことを伝えるということをやっています。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。船橋委員からも実体験に基づくお話がありました。本当に、多種多様な

状況で今増えてきてるんだらうなと思います。

教育委員 佐古 順子

先程、市長から学校の中に分室を作りたいって話をいただきましたけども、先日研修会に行きましたときに、アウトリーチ型の支援ということで、指導員が出向いて、訪問支援をしてお聞きしました。県外の市町村の事例ですけれども、公民館とか、学校の中にそういう教室を作って、学校が3回、公民館が2回、計5回行く地区とか、ちょっと離れた地区には、公民館で数回。公民館まで出てきてくれるお子様にはそれが実現できたというお話でした。

それと小学校3年生と中学校1年生全員に面談をするということでした。早期に発見すると、手遅れにならないケースがあるという、その2つが印象に残っております。

教育委員 中嶋 剛

ちょうど先週、佐古委員と同じで県の教育委員の研修会がアルカス佐世保であって、私もその適応指導教室の分科会に参加いたしました。

この中で松浦市の教育委員会が発表をしてくださった、適応指導教室の対策としてどういうものをしているか、例として4つおっしゃいました。

佐古委員が言ったように、小学校3年生と、中学校1年生全員に面談をする。という方がするかというと、県のスクールソーシャルワーカー、いわゆるSSWや、スクールコーディネーターなど全てを総動員してやりました。これが非常に良かったということです。早めに子どもたちの心の様子というのがわかった。小3はちょうど2年から3年になる時の分かれ目になる非常に重要な時期です。もちろんさっき出ました中1は、中1ギャップ。他校からも来ますので、そういうこともあって、松浦市自体は児童生徒数が少ないからこういうことができるのでしょうか。

大村市の場合は、2つの学年となると、2,000名になりますね。各学年1,000名と考えて。そうするとそれが果たして全員面談ができるかなあと

いうことも考えました。

それから、2番目に学期について、学期初めの休業日を1日延長して、4月1日から6日までを春休みとする。そして夏期休業を7日間短縮して、7月21日から8月24日までを夏休みとするということです。大村市の場合も早めに始めておりますが、このように24日までではないと思います。

それから、3番目に、みんなでオープンスクールということで、毎月初めの1週間、学校を開放する。心の教育を充実させる取り組みを学校でやりたいということで、その周知を、地区には防災無線等で知らせるそうです。それから市庁舎にはのぼりを立てて、今日はみんなでオープンスクールの日ですよ、ということを経区の市民に知らせることで、かなりの方がその学校に来てくださるそうです。

大村の場合は、心の教育週間ということで6月に1回だけやりますけれども、このように毎月初めの1週間をやるのはすごいなあと改めて思いましたね。

大村市としてもできないだろうか。さっき市長さんがおっしゃった、学校でそういう子どもたちを受け入れる場所がないかと考えたときに、従来は保健室登校や教育相談室を使って、学級に行けない子ども達を教育すると。大村市の場合は空き教室も少しありますので、そういうところを利用する方法もある。学校支援教育センターと文科省は言っていますけど、そういうものを設置したらどうか。

もう一つ、新たな取り組みとして、不登校特殊学校を文科省が進めています。全国で300校を作りたいと。まだ今年の3月時点では20何校しかできていません。だから、県で一つということで、大村市が手を挙げれば、これができるかなということですね。いわゆる不登校特殊校と呼んでいるようです。こういうものもあるから、考えの一つに入れておいた方がいいかなと思います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。本当に様々な視点からご意見をいただきまして、そういったことも含めまして、今日は外部から内海 博文先生に、お越しいただいていますので、私からちょっと内海先生のご紹介をさせていただきたいと思います。

私自身は小中学校の野球部の後輩ですので、小さい頃から知ってまして、内海先生は昔から非常に活発な方で、学業も優秀で、大村高校のあと鹿児島大学に行かれて、塾講師をされていたんですが、辞められて社会活動家として今いろいろ活動されています。

「まつなぎや」さんのオープンについては、日本財団が日本で初めて、ヤングケアラーの支援拠点を作ったということで、一方でフリースクールも行いながら、不登校児の対応をされています。内海先生自身は不登校ではなかった、どちらかというと活発だった方が、今不登校に対して支援をされている中で、いろいろ見えてくるところがあって、先ほど船橋委員からもありましたけど、私自身で言うと、なかなか自分が経験していない中で支援をさせていただいているのは非常にありがたいなと思っています。そういった視点から見えてくること、また、こういう対応が必要ではないかというようなことを今日は思いっきり話していただきたいと思います。内海先生よろしくお願ひします。

NPO 法人 schoot 代表理事 内海 博文

すてきな紹介ありがとうございます。まず今日は総合教育会議という場に呼んでいただいて、スクートがやっている不登校支援の活動について皆さんに話ができる場を設けていただき、園田市長、遠藤教育長、そして教育委員の皆様、大村市の各担当課の方々、大変ありがとうございます。

前回のこの総合教育会議を傍聴してまして、市長から次は不登校一本でいくかもしれないという話があって、そのあと企画政策課の方からお声をいただいて、その時が市長選の前だったんです。これもしかしたら次呼ばれるとき市長変わってる

かもしれないなと思ひまして。もしこの内容を、例えば給食費無償化でやってくれとか、ローマに子どもたちをどうやってやるんだという話はちょっと僕には対応できないなと、かなり不安でいたんですけども、市長が再選されたということで大変よかったと申し上げたいと思います。

ということで、発表の方に移りたいと思います。フリースクールの現場における不登校への支援についてということでお話をさせていただきます。

まず、うちはNPO法人という法人格を取って2019年からフリースクールをやっています。その他、保護者からの相談も常時受け付けていますし、親の会や勉強会などもやっています。そしてありがたいことに、2021年度からは大村市教育委員会から最初の出席扱いの民間施設として承認をいただきました、というのが概要です。

そして少しさっきありましたけれども、「まつなぎや」というヤングケアラーの支援を昨年度からやっております。

今日はその話ではなくて、フリースクールに限定して話をさせていただきたいと思います。設立の背景なんですけれども、まず学校に行けない子どもたちが、家以外で安心して過ごす場所というのが、ちょっと足りていないなということを僕自身が感じていました。

僕はフリースクールをやる前に、個人事業をやっているんですけど、その前に塾の先生をしていて、高校生たちを見てたんですね。高校生たちは、例えば学校をやめても、通信制に行きますとか、それから高卒認定試験、昔の大検ですけど、大検を受けて進学するとか、もしくはもう15歳以上になっているのでアルバイトをするとか、社会的な選択肢がたくさんあるんですよ。

ところが小学生、中学生というのは、学校に行けなくなった瞬間に、地域に居場所がなかったら家しかいる場所がない。適切な社会関係を取り結ぶ機会を失ってしまっているのと、それから当然ですが、学習機会を失っている。こういう地域の

状況は、少しずつ変えていかないといけないだろうということで、とにかく小中学生が不登校になった時、学校に行けない時にいる場所を作ろうということで設立しました。

それからもう一つは、これも見過ごされがちのところなんですけれども、保護者の方が無茶苦茶悩んでいます。特にお母さんですけれども。毎月やっている親の会をした時に、そこで泣かれるお母さんも結構いらっしゃいます。なかなか相談ができない、孤独に悩んでいる保護者の方が非常に多くて、これは常時相談する場所を地域に作らないと、単発でやってもちょっと追いつかないということで、毎月やり始めました。

先ほど中嶋委員からも少しお話がありましたけれども、全国の不登校の児童、小学生中学生の変化です。昨年度は29万9,048人です。2013年からはかなり上がっていきまして、このうち不登校の子の約4割が孤立していると言われていて、どうということかという、学校や相談機関などから支援を全く受けていないという子どもたちが4割いるということです。11万4,217人。これをそのまま当てはめると、大村市でも不登校になっているけれども、どこにも相談へ行けない家庭が4割ぐらいいるかもしれないということがわかります。こうしたことがあるから、この二つ、地域に居場所を作るというのと、保護者の相談場所を作るということでフリースクールをやりました。

ざっとどういうふう運営しているかという話をしますけれども、昊天宮の前におおむら学習センターという通信制高校のサポート校があります。その場所を一緒に使わせてもらっています。なのでここには小学生・中学生・高校生が一緒にいるんですけれども、スクートの場合は、経営は全く別でやっているんですが、火曜から金曜の10時半から15時までで、料金は月額1万7千円でやっています。所属している児童生徒数については、2019年が4名です。最初始めた時ですね。2020年がゼロでこれはコロナが流行って、子どもたち

がどこにも行けず、フリースクールに来ることも非常に難しいということがあったのかもしれませんが、2020年は結構厳しい年でした。2021年になると、いっきに12名に増えるんですが、これは一つは大村市から「出席扱い」というものを認証いただいたというところがあるんですけれども、もう一つは実はここで月謝を一旦、1万5千円に下げました。もともとは3万5千円程度でやっていたんですが、なかなか子どもが来なくて、2020年の0名というのがあったので、これはもしかしたら経済的な理由で来れないという、一定数の家庭があるのではないかとということで、月謝を下げて、それもあってか12名で、翌年が14名、今は皆さんの資料の中には10名と書いていますけど、先週から2名増えまして今12名になっています。

今年度、12名の子どもたちがスクートに在籍していて、小学生2名で中学生10名です。全く学校に行けていないという子もいれば、ちょくちょく行っているけど、時々スクートに来る子もいます。

スクートでの過ごし方は、10時くらいに登校して来ます。そして午前中はプロジェクト授業で、これはまたあとで説明しますが、お昼があって、そのあとはいろんな勉強をする時間や、本人たちが決めたことをやるという活動があります。プロジェクト授業というのが、高校生たちと一緒にプロの先生たちからいろんな授業を学んでいくということをやっています。これはもともと通信制のおおむら学習センターということで、高校生が受けていたところに一緒に入れてもらっています。

美術工芸の授業は、講師が中原 真希先生と、佐藤 恵先生、陶芸家の先生ですけれども、一緒に美術を教えてもらっています。料理は、山下 初美先生という方がやってくれていて、それからヨガは森岡先生。これは近くの公民館を借りてやっています。そして書道は、佐藤 鳳水先生に来ていただ

いて、単純に普通の書道だけじゃなくて、カラフルなものや落ち葉で書いたりもしているんですけども、実際にプロの先生から、色々なことを午前中に学ぶということをやっています。パソコンや音楽の授業もしています。

週の時間割は資料2の右下の部分のようになっていて、フリースクールは結構子どもたちに自由にさせているイメージも片方であるかもしれませんが、一定程度うちはちゃんと関係性ができた上で、ちょっと勉強してみようかみたいなことは子どもたちに言っています。大体このAのところを選ぶ子が多いです。どうしてもプロジェクト授業に入れたいという子は、その子の意思を尊重します。

“みんなで考える時間”は僕の担当なので、子どもたちと一緒に決めて何かをやることもあれば、今中学生や小学生でも、例えばLGBTQに関しての話とかをしっかりとしないといけないということで、そういうことを僕から提案することもあります。こういうふうにして子どもたちが過ごしています。

まずどういう方針でやっているかというのと、子どもにとって、とにかく安心して自分でいられる、そういう場所にしようということをやっています。ちゃんとしなきゃとか、こういうだらしなない姿を見せたら駄目とか、そういうことではなくて、結構だらっとしている子もいるし、なかなか勉強しない子もいますけど、その辺はいろんな話をしながら、その状態自体は受け入れていく。そういう形でやっています。

まず第1の目的は、その子が元気を取り戻すこと。これは学校復帰や、登校することを第1の目的ではなくて、まず元気を取り戻すことをやろうと。なぜかという、その子が例えば元気になったら次のステップに行けるのですが、元気にならないとなかなか次の、例えば学校に復帰しないでも、高校にはチャレンジしてみようかなとか、新しいことにチャレンジしてみようかなという、そ

こまで行かないんですよ。なので、とにかく元気を取り戻すことを第1の目的とする。そしてスタッフと子どもと、子ども同士の関係づくりを一番重要にしています。なぜかという、これはうちに見学に来たときに、子どもたちの顔ってすごく暗いんですよ。本当に自分はここにいていいのかなみたいな。なので、学校に行けない自分のことを駄目なやつだと、基本的にほとんどの子が考えています。すごく落ち込んでいるんです。この状態にある子どもたちというのは、勉強しようとか、そういう気持ちには全くならないんですよ。

個人的な話をしますけど、僕、高校3年生の春に失恋をしました。それこそ園田市長と同級生の女の子なんですけど。僕受験の年、全然受験勉強ができなかったんです。さっき鹿児島大学と紹介してくれましたけど、僕失恋してなかったら多分東大に行けたんじゃないかなって、僕自身は考えているんですけども(笑)。自分と比較するのはなんですけど、気持ちとしてやっぱり勉強に向くとか、学校に行くっていうのは、本人が自分の問題を抱えていなかったら行けたりする。ところが自分自身が落ち込んでいる状態だと勉強とかに向かないんですよ。なので、とにかくそこをまずしっかりと、こちらがサポートしようということをやっています。

次のページは、大体こういう形で考えているというモデルなんですけど、この「自分は大丈夫」、例えばちょっと失敗しても自分は大丈夫とか、そういうふうに思える自分というものを子どもたちにしっかりと与えたいな、ということを大事にしているので、この「今のありのままの自分」、良いところも悪いところもある。道徳的には正しいところと、正しくないところもあるけれど、それでも自分を受け入れてくれる、そういう機会をたくさん子どもたちに、授業や関わりを通してあげたいと考えています。それは別に特別なことではなくて、毎日のいろんな言葉のやりとりなどでそういう機会をあげようと思っています。一応これ

がフリースクールの方針、こういう形でやっていますよということです。

ここからは、不登校状態にある子どもたち、保護者の実態について少し話をさせていただきます。

家にいるときにどういう気持ちで過ごしていましたか、というのをうちが毎年の高校生たちと不登校だった子どもたちに聞いているんですね。

どういう状況で家で過ごしているかという、基本的に子どもたちは、さっきも少し言いましたけど、学校に行けない自分を否定しています。自分は駄目なやつだと、自分のことを責めながらずっと過ごしています。この辺の内容も、全部資料の中には入れていますけれども、基本的にはもう自分は駄目だし、何をやってもできないし、どうせ自分なんかというふうに過ごしている子がほとんどです。なので、例えば学校に行けなくてゲームバリバリやっているような子はほぼいません。基本的に子どもたちは、家の中で悶々として過ごしているのが実態です。

それから次のページは、学校を多く休んだことに対する感想を、文部科学省が調査しています。先ほど教育委員会から出された資料1のデータは毎年出されているんですけども、あれは先生たちに聞いた分の結果です。令和2年度に文科省が、「不登校児童生徒の実態調査」をしているんですが、これは子どもたちと保護者に聞いています。不登校になっている子どもたちと、その保護者に聞いたので、ここには子どもたちの声が反映されています。じゃあ学校を多く休んだことに対してどう感じているかという、「もっと登校すればよかった」と思っているんですよ、結構。“登校しなかったことは、自分にとってよかったと思う”が12%ぐらいで、仕方がなかったとか、自分で積極的に選んだ選択肢として不登校があるのではなくて、そうせざるを得ない、学校に行っていないは自分というものが守れない、自尊感情がぼろぼろになってしまうというようなことが背景にあるのだと思います。なので、子どもたちはやっぱり行け

ないことに対して後悔しているし、なんで自分ではできないのかなと考えています。

それからもう一つ、これもさっきの実態調査で子どもたちに聞いた分のデータなんですけど、文部科学省がやっていますが、最初に学校に行きづらくなったきっかけとしては、不登校の要因はいろいろあります。例えば、小学生だと先生のことが一番割合が高いです。3割ぐらいあります。それから身体の不調、生活のリズムの乱れなどが続きます。中学生になると、身体の不調というのが出てきますけど、勉強がわからないというところも出てきます。つまり学習のつまずきというのが中学校の場合は、不登校の要因として大きく出てくるのではないかなと思います。この辺も全部資料は載せているので、見ていただきたいと思います。やはりこの身体の不調や頭痛、お腹が痛くなるとか、これはストレスが要因だろうと考えられるので、何かしら学校に嫌な思いがあって、それでどうしても身体症状に出してしまうのではないかと考えています。

それから次に保護者の気持ちです。これはスクートで毎月親の会をやっています。それを全部議事録をとって、どういう内容が出てきているのかを記録しているんですが、その中でよく共通して出てくるものを抜き出しています。多くの場合、保護者の人は、まずどこに相談すればいいのかわからないということで悩んでいます。それから子どもへの接し方、どういうふうに子どもと接したらいいんだろうか。それから自分のことを責めています。これはお母さんが特になんですけども、旦那さんから「お前のしつけがちゃんとしていないからだ」とか、親戚から「ちゃんと子どもを学校にやれ」というふうにひどく責められたりするんですね。そういうことがあって、お母さん自体、保護者の人自体もすごく悩んでいるところがあります。だから子どもも保護者も自分を責めて、孤独に悩んでいるというのが実態なのではないかなと考えています。しかもその中で、先ほども紹介

しましたが、約4割の家庭はどこにも相談できていないという状況にありました。

スクートが、とにかく安心できる場所を提供するというところを、なぜ重要視してるかというところ、人は安心できる場所があるから自分を受け入れて、チャレンジしたり、社会のために行動するということが実はデータとしてわかっている、安心できる居場所と自己肯定感との関わりについて調査しています。これは内閣府が調査しているんですけども、居場所の数に連動して、自己肯定感が高くなっていきます。例えば今、自分が幸せだと感じる割合も、居場所が増えると増えていきます。また社会貢献意欲ですね、社会のために何かしたいと思う意欲も、居場所の数に連動しています。チャレンジ精神も一緒です。当然ですけど、自分に自信がない状態で、社会のために何かしようとは思わないんですよ。チャレンジしようと思わない。失敗したらどうだろうというのが先に来ちゃうので、とにかくその子が今ある状態を受け入れる。そういう居場所として、フリースクールを運営しています。

それから今後の大村市における不登校児童生徒数について試算をしたんですけど、まず皆さん大変申し訳ないのですが、資料の中の数字が間違っています。表があると思うんですけど、小学生の令和4年が98になっているんですけど、93です。5年後、約年10%の割合で不登校の児童生徒数が増えたと仮定した場合、令和9年、次の市長選がある年だと思いますけれども、かなり数が増えてしまっていて、小学生は、皆さんの資料の中で158と書いていますが、正確に言うと150です。合計人数が437人になります。ちなみに10%というのは、特に小学生でいくと、大村市の場合は、平成26年が16人、そこから令和4年まで、平均でどれくらい増えているのかを計算しても約20%なので、実際そこよりも少なく仮定してるんですけども、こういう状況になっています。小学生150人、中学生287人、合計437人。今のまま増加し

てしまうと、令和9年にはこの人数になってしまいうんじゃないかなというふうな計算をしています。

どうすればこの状況を避けることができるのだろうかということと、もう一つは、不登校の増加自体は変えられなくても、子どもがよりよい人生を送るための状況、子どもの周りにちゃんと自分のことわかってくれる、そういう機会が環境としてたくさん整えられている、そういう社会にしていくにはどうしたらいいのかということも皆さんと一緒に考えていただきたいなと思っています。

大村市長 園田 裕史

内海先生ありがとうございます。実際にご自身がなされているところから、子どもさんと親御さんのお声を聞いてまとめていただいて、全国的な資料や数字、将来的な試算も含めて、危機感を持つべきだというようなご指摘も頂戴できました。今の発表について、皆さんからご質問、ご意見等をまずはいただければと思いますが、感想でも結構ですけども何かございませんでしょうか。

教育委員 朝長 昭光

まず、内容というより非常に面白いなと思っていたんですけども、この間マリオットホテルの支配人が来られている講演を聞いたときに、イギリスの方なんですけど、講義は自分の興味のあることをやっているとか、今紹介された授業のようにしているのではないかなと思ったぐらいで、今の義務教育を否定するわけではないのですが、私も医者になったけれども、小学校のときから医者になると決めてたんですね。だから勉強せんといかんと思って勉強したんですよ。ただ勉強して医者になってから、私は数学が大好きでいっぱいやったけど、サインコサイン全く役に立ちませんもんね。だから、もっと自分の将来にとって役立つ授業があったほうがいいのか。そのために、その先を見ることをもっと教える意味合いで、いろんなことをしていくのがいいのかなあと思います。

私が心配したのは、佐藤先生とか、栄養士さんなど講師の方をそれだけ呼んで採算は成り立つのかなど。採算が成り立たないと新しいこういうものは増えてこないのではないか。あくまでも義務教育を否定するわけではなくて、非常にいい面もあるけれども、もうちょっと自由な教育があってもいいのかなと思います。最近私も全く教育から離れていて、教育委員になってから勉強している感じなので、変なことを言うかもしれないけれども、まずは採算性が成り立たないと誰もやれないだろうと思ったので、そこが一番心配でした。その対応を教えてもらえればというのと、こんなことを質問していいのかわかりませんが、国がもっと何か方針を出しているはずなんですけれども、国の方針についてさっき中嶋先生が言われましたけれども、そういういろんな中で、やっぱりいいものというのは幾らか、全国で頑張ってる方がいらっしゃると思うので、そういった良い例をもっと取り込んでいく、そういう情報を集めるのも一つかなと思いました。いくつか言いましたけど、内海先生のことでもまずよろしくお願いします。

NPO 法人 schoot 代表理事 内海 博文

採算については、スクートとして入っているおおむら学習センターは、経営体として全く別なんですけど、スタッフはそこに一緒にいるんですよ。なので、おおむら学習センターのスタッフが、スクートの子たちも一緒に見ている状態なので、おおむら学習センターから実際には委託するような形式です。そこから職員のお金は出ているので、成り立ちます。つまり逆に言うと、フリースクールを単独で全く別のところでやろうと思ったら、月謝1万5千円では無理です。基本的には全国の平均で言うと、月謝は3万5千円ぐらいです。長崎のクレイン・ハーバーという20年ぐらいやっているフリースクールもありますけど、そこも3万5千円ぐらいを取って、何とか成り立っているという状況です。なので、さっき市長からもありましたけれども、公費助成を出して、フリースク

ルを支援している自治体も結構あると。それでないとなかなかサポートができないような状況にあります。

教育委員 船橋 修一

内海さんの話は、何度聞いても面白いなと思うんですけど、非常に個人的に思うのですが、これだけ不登校の子が多い、これは言い方を変えると、今の私も朝長先生と同じように、義務教育否定するのではないんですけど、日本の教育に違和感を感じているということが言えると思うんですね、私がそうでしたから。

私は毎年のように、社員と一緒にもう10年以上、世界の先進地の小中学校の教育現場を見て回っていたんですけど、コロナで3年間行けなかった。3年間行けなかったのを解放する第1回目として、カリフォルニアに行ったんですね。カリフォルニア州立大学と、複数の私立大学を回ってきたんですけど、昔からアメリカはフィロソフィを大事にするんですけど、今は呼び方が変わっていて、リベラルアーツを大学4年間のうち1年間は、徹底してやると言っていました。今の日本の教育体制の中では、一番役に立たないと言われている教育なんですけど、今世界の中ではこの役に立たない、なぜを問うっていうのを、徹底的にやらせているんですね。考えなきゃいけないので。言われたことだけやってるのは、社会で役に立たないので。逆に言うとこれだけ義務教育についてこれない子がいるということは、その子たちに徹底してそのリベラルアーツを教え込んで、全く違う路線の教育をするというのは、将来ものすごく花が咲くんじゃないかと思うんですね。

個人的に言うと、私がなぜ県立図書館に行っていたかという、補導されないからです。僕は体が小さかったので、浜町をうろうろしているとすぐ補導されてたんですね。県立図書館になんとか滑り込めば、そこに1日居ても補導されない。

そこでかなりいろいろ読んだ本の中で、結構哲学とかにはまったんですね。それが今になって、

自分の中で一番役に立つなど。さっき朝長先生がサインコサインは役に立たないと言ったけど、微分積分はすごく役に立つと思います。やっぱり微分積分は今になってみると必要だなと。その微積分で出てきた解を、頭の中でビジュアル化して、多次元化して、絵にして伝えていくと理解してくれるんですね。

私は今の教育の中で、すぐ役に立つものばかり教えることが、今までの世の中で本当に役に立たないのかなと思っているので、この不登校の子の中に、ものすごく潜在性を感じるんですね。今の教育システムに合わないという子たちは、たぶん次の教育の適格者なのではないかとすら思っているんで、義務教育のサポートではなくて、違うやり方を徹底して教え込んだら面白いのではないかと個人的には思いました。

教育委員 中嶋 剛

まさに私もそう思います。不登校に陥ってる子どもの中には、社会性や耐性がかけている子もいます。だからそういうものを徹底的に教える必要がある。ソーシャルスキルといいますね、社会生活の技術。だから体験学習、その他が非常に重要なものとなっています。そういうものを、フリースクールとか、或いは大村市がやっているあおば教室やコンネでも取り入れなければいけないと思いますね。特に今お話を聞いてみて、学校との連携はどうなのかということ。それから、大村市が設置しているあおば教室やコンネとの連携。そういう、いろいろなものがまだ、それぞれの立場でやっているだけで、連携ができていないなあと改めて思いますね。教育委員会や、あおばとコンネは連携があるだろうと思うのですが、教育相談室というのも設けてあります。そういういろいろなものをひっくるめた連携といいますか、どこかがイニシアティブをとって、今後やっていく必要があると私は思います。

それからこれは質問ですけど今スクートに通っている子どもたちの、小中別はわかりますか。

NPO 法人 school 代表理事 内海 博文

今 12 名なんですけど、小学生が 2 名で、中学生が 10 名です。この 10 名の中には、大村市外から来ている子もいます。東彼杵とか、別の地区から来ている子もいるので、大村市だけではなく、10 名という形です。

連携に関してですけれども、出席扱いというものをさせていただいているので、来た子に関しては、毎日何時に来て、何時に帰ったかというのをメールで所属してる学校に送っているのと、毎月その子がどういうふうな過ごし方をしたのかを、大体まとめて月に 1 回、10 月だったら 11 月の半ばぐらいまでには各学校に送って、様子がわかるようにしています。コンネやあおば教室との連携はないんですけれども、遠藤教育長がしていいと言うなら、僕は積極的にやっていきたいと思っています。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。前田委員から何かありますか。

教育委員 前田 愛

不登校児童生徒の推移を見ると、もう増える一方で、5 年後の不登校児童生徒数が、内海先生が出された数字は 437 名となっていますけども、不登校を防ぐための、何か対策や方法、取り組みなど、初期対応を学校では何かされてるのかをお聞きしたいんですけど、どうでしょうか。

教育政策監 江浪 俊彦

誰もが笑顔で学校生活を送るためにということで、市内小中学校で欠席があった場合に、どのような対応をしていくかというようなことを、マニュアル化しております。

1 日目、欠席の時は必ず電話連絡を取りましょう。2 日目もですが、3 日目になったら家庭訪問をしましょう。このようなことで取り組みをしているところです。

昨年まで教育相談室で相談員をしておりました。様々な要因があって、不登校になっている子ども

のお母さん方からお話を聞くことができたのですけども、先ほど中嶋委員もおっしゃいましたように、学校の問題もあるだろうと。もう一つは家庭にももう少し頑張るって欲しいなというところもあります。そして子どもの発達に関わる部分もあったなあと感じております。ですので、一応対応マニュアルはあるのですが、やはり個々に応じて対応していく必要があると感じているところです。とにかく今は、学校とその子どもさん、或いは家庭との関係を途絶えさせないというようなことに取り組んでいる状況でございます。

もちろん学校もなんですが、教育委員会でも相談室やコンネ、あおば教室が関わりをもったり、先ほど連携はどうかというお話があったんですけども、教育相談室が中心となって、あおば教室はどうですか、コンネはどうでしょうか、というようなことを聞いて、つなげている状況です。それでもどうしても会えない子どもというのがあります。そういった子どもには、家庭訪問をします。これは学校を拒否された場合には、教育相談員、或いはスクールソーシャルワーカーが外向くというような措置をとっております。

NPO 法人 schoot 代表理事 内海 博文

今、前田委員から話があったと思うのですが、学校が、そもそも不登校を起しにくいとか、不登校自体が起きにくいように、どういうふう改善していくかという話だったのではないかと思います。不登校の問題を考える時に、話を三つに分けないと、錯綜してしまうんですけど、まずすでに不登校になっている子どもと、その保護者の対応をどうするか、どうケアするかというのが一つ目です。

それから二つ目は、そもそも不登校が起きないように、学校の中をどういうふう、どんな子ども来やすいような形にしていくにはどうすればいいか。

三つ目が、船橋さんがおっしゃったみたいに、そもそも日本の中で教育というものをどのように

考えていくのか。

この三つに分けて話をしないと、今どこの話をしているのかがわかりにくくなると思うんですけど、おそらく前田委員が言われたのは二つ目の、学校をどういうふうに変えて、そもそも不登校が起きにくい状況にするにはどういう対策をしますかという話だと思うんですね。

ところがスクールソーシャルワーカーとか、スクールカウンセラーは一つ目なんです。つまりもうすでに不登校になってしまった子どもたちに対して、心のケアをして学校に戻しましょう。これは全部事後対策なんです。だからスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを増やしても、おそらく不登校が減ることはないと思っています。これは実際に、名古屋市の全部の市立中学校にスクールカウンセラーを配置したけども、その年度その地区は不登校が増えました。つまり事後対策にしかなくてないんです。僕がよく言うのは、事後対策というのは、雨漏りで例えると、バケツを増やしてる状態なんです。バケツを増やしたところで、屋根を修復しなければ雨漏りは改善しないはずなんです。だからスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーを増やすというのは、実際には不登校の子どもたちを減らすという対策には僕はならないと思います。なので、おそらく前田委員が言われたのは、学校ってそもそもどんな子ども来やすくするためにどういうことをしてますかという内容なのではないかと捉えたのですが。

教育委員 朝長 昭光

スクートに通っている 12 名の方は、場所は昊天宮の前でしょ。遠い方は通うのが大変ではないですか。非常に困るのではないかなと思うんですね。各学校に先生がフリースクールを作ったら駄目なんですか。

NPO 法人 schoot 代表理事 内海 博文

例えば広島には、実際校内にフリースクールのような形を作っているところもあります。

大村市の中にも別室を設けている中学校や小学校もあって、この別室のことをスペシャルサポートルームというんですけど、文部科学省が、これをとにかく1校の一つ作ってくれという方針を出しております。ただ別のところで別室を見てみると、別室自体が教室のように運営されているところがあるんですよね。これは別室を設ける意味が全くないんですよね。もちろんそのスペシャルサポートルームを、さっき園田市長が言ったみたいに、学校の中にワンクッション置くという場所は必要なんですけど、これは運用をしっかりとやらないと、教室バージョンⅡになったら子どもはそこには来ないんですよ。

実際に僕は今郡中のPTA会長をしていますけど、今郡中学校の松崎校長がその別室を利用している保護者向けに保護者会を学期に1回やってくれているんですよね。そこで出てくるのは、我が子は別室には行かないと言っていると。何でかという、別室にいたら教室に戻るように促されるから。それだったらそもそも学校に行かない。つまりサポートルームが安心していられる場所だったら行けるけど、そこにいて、あの嫌な教室に戻ろうね、もうそろそろ時間だから行きましょね、と言われるような運用のされ方だと、それは別室として設置する意味が全くないので、その辺りは設置する時にしっかりと運用の仕方までを考えないと、結局教室のバージョンⅡになって、そこにも行かない可能性が高いかなと思います。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。とても時間がまたオーバーしてしましまして、白熱して、本当に大村市総合教育会議、素晴らしいなど、ありがたいなと思っております。

一旦ちょっと閉じさせていただきたいと思いますが、もう本当に忌憚ない形で、実際に意見交換をさせていただきまして、今日も実りある会議になりまして、本当ありがとうございます。ただ傍聴の方々からも、なかなか結論が出てないじゃ

ないかって思われるかもしれませんが、そんな簡単に結論って多分出ないんですね。

初めてこうやって内海先生の話をも事細かに聞くことができました。スクートさんが、やっぱり素晴らしくやっていた背景には、学習センターの先生方との連携も含めてさっき朝長委員からもありましたけど、あの学習センターは、鹿児島島の神村学園が母体ですので、非常にしっかりしています。私は内海さんとのご縁で、毎年卒業式に呼んでいただくんですけど、本当にいい学校だなと思っています。高校を中退した子や、高校に行けなかった子たちが、何とか頑張っているんですけど、本当に生き生きとして卒業していきます。うちの近所の子も、市内の高校を辞めて学習センターに行って、卒業したあと専門学校まで行って、今はちゃんと働いています。

本当にこういう場が、選択肢が大村市内の中にあることが非常に市長としてもありがたいし、親だったら、こんな場所があるっていうのは本当に心強いと思うだろうなど。だから多くの方々に知っていただきたいと思いますし、年々多分生徒も増えているのではないですかね。さっき船橋委員からあったように、あえてそこを選ぶという子たちも多分出ているでしょうし、今後も出てくるんだろうなと思っています。

最後に、正解じゃないかもしれないですけど三つにまとめさせていただきたいのですが、いろいろとご意見をいただいた中で、今日は教育委員会何もやってないじゃないかという会ではもちろんないし、江浪政策監をはじめ、教育長ももちろんですけど、教育委員会頑張っています。本当に一生懸命やってもらっています。僕自身も、一番は学校に帰ってきて欲しいというのが軸なんですよね。成績が良い悪い、勉強ができるできないもそうですけど、友達と過ごす時間とか、部活をやるとか、学校の中で何かそのことでしか、大人数の中でしか得られない体験もあったりするし、運動会もそうですし、ただその場で過ごしたい、楽

しかつたと思ってもらえるように頑張らなきゃいけないし、そうなるんだったら、ぜひ戻ってほしいなというのがやっぱり一番軸ではあります。

ただ、戻りたいけど戻れないという子がこれだけいるんだよ、というのが内海先生の話だと思うので、そこは戻ってきてもらうためにも、まずは場所を作りましょうよ。学びの提供をちゃんとしましょう。これが多分二つ目なんだろうなと。

三つ目は、今後船橋委員が言うみたいに、多様化しているので、本人が望んで、そういう別の選択肢があるということ、これは義務教育では残念ながらないかもしれないですけど、大村市の子どもたちにと考えるときには、先を見て考えていくということ、いよいよしなければいけない段階にもあるのかなと思ったりしています。

令和9年度の不登校児童数の試算437人という数字を、そのまま現実のものにはならないようにもちろんしなければいけないんですけど、そこには、単純に学校に戻ってきてくださいだけではなくて、いろんな視点の中で対応策を講じていかなければいけないなと思っています。市としては、その一つに、ぜひフリースクールスクートさんをはじめ、他にもこのようなフリースクールがありますので、その部分との連携、ご協力いただくということと、学校内分教室というか校内フリースクールみたいところが、どのような運用のあり方で、ハード整備を含めて、教室があるのかないのか含めて、どういう形でできるのかということ、しっかり検討しなければいけないということ、しっかり具体的に今後進めていきたいなと思っております。なので、そういうことも含めて、最後、内海先生に締めていただきたいのですが。

NPO 法人 schoot 代表理事 内海 博文

締めじゃないんですけど、学校を僕も全く否定はしてなくて、それはうちに来ている不登校の子どもたちの9割は学校に戻りたいという気持ちがある。ほとんどの子は、地域の安心できる居場所ではなくて、安心して過ごせる学校を望んでい

ます。

大村市長 園田 裕史

私も学校に戻ってきて欲しいという軸は持ち続けたいと思いますし、教育委員会もちろんそうですし、そのために何ができるかということがまず第一義的だと思いますので、教育委員会として、大村市の教育行政として、どうしていくかということ、しっかり今後議論して固めていきたいなと思います。実際に、総合教育会議ではなくて、教育委員会の場でまた今後も揉んでいただいて、ぜひ行政サイドと連携をして、予算がどのぐらい伴うのか、どういった運用になるのか、その時に人がどのぐらい必要なのか、そこをしっかりと今後も進めていきたいと思っています。

最後になりますけど、いや、最初に芽を摘もうよ、という話がさっき前田委員からもありましたけど、学校でできることと、もう一つは、ちょっと今日の話とずれますけど、発達障害の子どもも、ものすごく増えています。なので、未就学児から小学校に入るときに、落ち着かない子どもたちがやっぱりいて、この落ち着かないことで不応を起こして不登校になる子も絶対います。これについては、放課後デイサービスも含めて、これはこども未来部が中心になって対応をやっていかなければいけない。だから、教育委員会の学校現場の不登校だけではなくて、放課後デイサービスも含めた、発達障害、特別に支援を要するお子さんに対してどうしていくかというの、一方で大事なのかと思うので、その部分は行政サイドこども未来部でしっかり進めていかなければいけないし、教育委員会としては、補助員を増員して対応していただいていますので、その部分をしっかりと進めていきたいと思っています。

教育長 遠藤 雅己

最後に私から一言、内海先生、本日はありがとうございました。いつもお世話になっております。

決して学校を否定しているのではないということ、はわかっております。私どもも、フリースク

ルを否定していることではない。

ただ私が一番頭に残っているのは、義務教育という言葉がありますけれども、子どもたちの大部分は学校に行かなければいけないという、義務と感じている子が多いんですね。それが最近はずみを出しているのではないかと。そして、どんなに苦しくても、しんどくても行かなければいけないのが義務教育だと思っている。でもそれは違うんだと考えます。子どもたちが持っているのは、学習権です。学ぶことです。学びたいと考えたときに、学んでいいという権利ですので、そもそも義務を持っているのは我々大人であって、その子どもたちが学びたいと言ったときに、学ぶ方法すべてを提供しなければならない。それが我々大人たち、教育委員会が持っているものです。そういう条件の中でなければ真の学びではないと。教室の中に正方形のタイルのような、縦・横まっすぐ並べられたものに並ぶことができる子だけが学んでよいということではないわけですね。だからすべての子どもたちが、いつどこで誰と何を学びたいのか、それを提供するのが我々であると、今からの時代はそのような方向性であると思っています。

先週も上京し、大村市内でフリースマイル大村の関係者の方と話したんですけど、北部、南部でそれぞれ50名ずつぐらい登録者がおる。だからちょっと困り感のある子たちがそれだけ増えてきますよ、だからフリースクール必要ですね、しかし利用する人にとって使いやすいような料金にして欲しいですね、我々はフリースクールはきちんと補助金が福祉部門で出てるからいいんですけど、全くその部分が出ていないですもんね、それは親御さんも大変ですね、ということでございます。

最後に、ぜひ読んでいただきたい。これは釈迦に説法でございますけど、講談社から出ている「バーバパパのがっこう」でございます。この連載がやっぱり、基本中の基本ではないかと思えます。この実践する学校が、彼杵の「きのくに学園」であるのではないかなと思っています。

これから先、大村市の子どもたち一人一人が、生き生きと生活できるように、何とか頑張っていければなと、教育委員会でも考えているところです。コンネとあおば教室とも連携・協力して、ぜひ提供させていただければと思いますのでよろしくをお願いします。

大村市長 園田 裕史

ありがとうございます。今日もいい総合教育会議でした。腹割って、こうやってみんなでいろいろ話ぐできましたので、ぜひいい方向に次に向けて取り組みを進めて参りたいと思いますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

以上で本日の総合教育会議の議題、協議事項は終わりますので事務局に一旦お返しいたします。よろしくをお願いいたします。

企画政策部長 山中 さと子

それでは次第5その他ですが、皆様から何かございますでしょうか。

次回の総合教育会議ですが、今回は非公開の意見交換会になります。日程は後日改めてご案内いたします。

以上をもちまして、令和5年度第3回総合教育会議を終了いたします。

本日は誠にありがとうございました。